

巻頭言

2008.4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

茗溪塾塾長 宇野雅春

主体的に生きるということ

4月がスタートしたばかりなのに桜の花はすでに散ってしまい、何かちょっと物足りなさを感じる今日この頃です。入学式なのか、真新しい制服の晴れがましい親子連れを時々見かけます。晴れて大学生になった生徒の中には、茶髪にピアス、派手なコスチュームやヘアスタイルと青春真っ盛り状態に変身する生徒もいます。ちょっと大人へ背伸びしてみる季節です。

このころになるとまた去年の生徒のことが時々思い出されます。入学式をどうしているだろう？ 学校には慣れただろうか？ 等々...

ちょっと気にかかるのが、高校受験で「受験」に最後まで真剣になれずじまいだったN君のこと。最後の最後で说得しきれなかったことがちょっと悔やまれています。第一志望を下げて楽な道を選んだ上に、そこも不合格になってしまった、それもよくあることなのですが「受験なんかたいしたことじゃない」といって自分から進んで方向性を決めたN君にしてもちょっと悔いが残ったようです。滑り止めのために受験した高校に進学を決めました。

もめたのは、正月特訓をやるかやらないか...。受講して当たり前という風潮に、N君は反発を覚えたようでした。「正月も勉強？ 冗談じゃない！」ということ。その弾みもあって「授業が難しいので塾も辞めたい」といいはじめたN君に大人がみんな翻弄された形になりました。

結局クラスも1ランク落とし、冬期講習はきちんとやるということで何とか受験までをつなげたつもりでしたが、結果は残念ということになってしまいました。今から考えるとN君は、塾という受験指導の場に対して反動的(反射的)に対応したということがわかります。授業のレベルが高すぎる...だからわからない。ゆえについふざけたり居眠りしてしまう。結果、成績は上がらない。という反応、反射、反発です。でも、それはちょっと違っていました。塾の成績は悪いときもありましたが、2年生の頃とは比較にならないほどの教科も成績が上がっていたし、なにより学校の成績は圧倒的に上位でした。家でも全くといっていいほど勉強しないN君が、学校で上位にいたということは塾での学習が効果を上げていたということになります。

私が悔いを感じるの、そのことを本人にわからせられなかったうえに、N君の勉強したくないという反動的な態度をきちんと戒めることが出来なかった事です。N君に必要なのはそこで「ちょっと待てよ」という一時停止ボタンを押すという作業です。「正月まで勉強！ 冗談じゃない！」と思ったときに、ちょっと待てよ。自分は受験生。今一番優先させるべきことは何か。第一志望にもう一歩成績が届かないでいるのときに、第1の優先課題は勉強時間の確保とレベルを上げるための特訓学習ではないのか？.....

本当はそんな単純なことではないのかもしれません。私にはわからないN君なりの悩みがあって、受験勉強にのめり込めなかったということも、考えられます。でもはっきり言えることは、どんな事情であれそれにもN君は反動的に対応しているのだろうということです。それが思春期というものといってしまうとそれまでですが...

私も思い返してみると、そんな時期が多々ありました。自分の将来とか、今後のことが考えられないまま感情に流されていくということです。そんなとき全てはまわりの責任だったり、他人の責任になります。つまり「主体的」ではないということです。こんな時は、強がっていても、必ず後で悔いが来ます。「主体的」な人は、自分の行動に責任を持つとしている人です。責任転嫁をしません。自分のことには自分で責任を持つということです。「反動的」な人は何事に対しても受け身な態度。その場その場の感情に流され、その原因を自分の外にあるとしてしまうということです。私は中学生の頃、大人の会話を聞いていて「感情に流されたらダメだ。」という言葉が気にかかりました。その後、何か嫌なことがある度に「感情に流されてはいけない。」という戒めを自分に課しました。今にして思えばこれが多分いろんな場面での危機を救ってくれたのだと思います。

入試結果がわかった直後の卒塾式に、N君はいつもよりぐっと改まった印象で参加していました。冗談にも以前のようにはならず、少し元気のない感じでしたが、卒塾式に来てくれたことだけで、私は十分だと思っています。ちょっと来づらかったとも(?)思うのですがそれを抑えて、最後にきちんと御礼を言いたいというきみの気持ちは先生達に十分に伝わっていました。

君の主体的な一歩がそこにあったと信じています。